



災害が起きたとき、現場で役立つロボットを作ろう。そんな思いに突き動かされ、開発に取り組む技術者を、こども記者が取材しました。東日本大震災を経て迎えた二〇一二年。ロボットの活用にますます期待が寄せられています。記者たちも、未来のロボットの姿から非常に自分にできることまで、思いを巡らせた。

災害で使うロボット開発

一人でも多く助けたい

向かったのは岐阜県御高町の小高い丘の上。ロボット開発に携わるキャリオ技研(名古屋)の実験飛行場で、富田茂社長(左)が「SARA」という名の飛行探査ロボットを見せてくれました。飛行機やヘリコプターの形をしていて、機体の下に小型カメラが付いています。

空から映像を送る

「何か起きたとき、サッと飛ばして空から情報を収集できます」。富田さんがコントローラーを操作すると、ウィーンと音を立てた瞬間に数百メートル上空へ。記者たちを捉えた映像が



無線で地上のモニターに送られてきました。これなら人が近づけない危険な場所の様子もつかめます。「地球の重力に逆らって物を飛ばすのは難しいです」。浮心という浮力の中心の位置や重心、空気抵抗、カメラを積んだ機体の重さなどを考えることはたくさんあります。「万が一、人に当たっても優しいものにした」と発泡スチロールで作ったものも。

動かない、壊れたなど完成までには失敗の連続。「思い通りにいかないときは？」との質問に「ロボットは規則通り動きま



誰もやっていなくて社会に貢献できる分野に挑戦したい」とこのような事業を始めました。「当初は見向きもされませんでした」。少しずつ知られるようになり、二〇一〇年に御高町で地面が陥没したときは現場へ出



「一人でも多くの命を助ける活躍してほしい」との願いが込められたSARA。記者たちも操縦させてもらいました。「災害時に活躍するロボットの開発は多くの人の知恵がいります。みんなにもアイデアを考えしてほしいな」。宿題を託され、コントローラーを握る手に力が入りました。

夢みるみんなへ。開発者・富田茂さんから

自分がこども記者くらいになると、このように仕事が楽しく思っています。自分がこども記者くらいになると、このように仕事が楽しく思っています。

過程で、災害時に使えるロボット作りを始めました。災害や事故のさまざまな状況を想定し、自ら課題を見つけ、解決していける人が求められます。YYA014-871_177PE_20120106



飛行探査ロボットを操縦する富田茂さん＝いずれも岐阜県御高町で(内) ロボットに付けられたカメラ (同) 操縦するときを使うコントローラー

活躍できるといいな



問題点が知りたい
愛知県一宮市西成小6年 林 沙和

こわれかたも練習
名古屋市長須賀小6年 森 涼夏

自分で解決するぞ
愛知県阿久比町南小6年 新美 若菜

発想がおもしろい
愛知県安城市錦町小5年 太田 涼介

役立つ日が楽しみ
名古屋白鳥小5年 山内 貴雄

だれでも発想をカタチに変える無限の可能性を持っている。そのことに集中して自分で課題を見つけ、自分で解決することが大切だと富田さんは教えてくれました。

ヘリコプターと飛行ロボットの長所を生かして助けるのは、役にたてるのだし、おもしろい発想だと思えました。そうさかんだんで、だれにでもできそうでした。

やめたくなかったことはいかか聞くと「あたえられた使命なのであきらめないでやりたい」と男らしく言ってくれました。「一日でも早く活躍する日が楽しみです」。

今回の大震災で思ったことは、経験を生かすことです。大人に期待するのは、問題点をしっかりと残すことです。私たちが大きくなっても大事な情報だからです。

飛行機は重力にさらわれないので、軽くなるまできれいに飛ぶことがわかりました。たくさん練習をして、こわれかたも練習できるようにしていきます。

今回のような震災が起こったときのために「家政婦ロボット」や、津波で流された人を捜査するロボットがあったらいいな。何年か先にできた方がいいです。

災害で動くロボットが、災害が起きているまで見向きもされなかったことに、はくはハッとしました。ロボットの開発がもっと注目される良いと思えます。

災害や事故は、いつどこで起こるか分かりません。何かあった時にどうするか、何かできるかを考え、できることから「1つ1つ行動」をしようと思えます。

ロボットの仕組みについて富田さんに質問することも記者たち